インドネシア植林ツアー

吉野ひとみ

【はじめに】

２年前、私は、中国、内モンゴル地区の砂漠地帯への植林ツアーに参加した。年々進んでいるという砂漠化を目の当たりにし、地球環境の保護の必要性を痛感した。今回、インドネシアでも、植林が必要とされていることを知った。なぜ、暖かく、水も豊富なインドネシアで、植林が必要なのだろうか？砂漠化のものとは違う植林についても学んでみたいと思い、“アジア植林友好協会”の「インドネシア植林体験ツアー」（２００６年１１月２１日～２５日）に参加した。

【熱帯雨林の減少】

１９９７年から１９９８年にかけて、インドネシアでは、熱帯雨林の大火災が起こった。その大火災で約５７０万ha、日本の九州と四国を合わせた面積に相当する森林が失われた。またそれ以前からも、違法な森林伐採は続いていた。それにより、地球上でインドネシアのスマトラ島と東カリマンタン（ボルネオ）島にしか生息しないオランウータンの住処も奪われ、現在、オランウータンは、絶滅の危機に瀕している。

【南方方面戦没者慰霊碑】

シンガポールを経由し、インドネシア東カリマンタン島のバリクパパン市へ。バリクパパンに到着し、まず向かったのは、南方方面戦没者慰霊碑。第二次世界大戦当時、インドネシアでは、３０００～５０００もの日本兵が命を落とした。その大半は、戦いによるものではなく、熱病や飢餓が原因だったという。この慰霊碑は、日本に向いて建っている、以前は、管理が行き届かず、周辺住民によって、敷地の一部が畑にされるなど、荒れていた。現在は、アジア植林友好協会によって、木や花が植えられ、整備されている。

【チーク苗畑】

次に、チークの苗畑へ向かった。チーク材は光沢のある質感や優れた耐久性があることから欧米を中心に重宝されており、世界的に供給不足となっている樹種である。植林地に植栽されるチークの苗は、ジャカルタで組織培養された後、ここでしばらく寝かせられる。約３ヶ月間で４０～５０cm 程度まで成長する。その後、植林地に運ばれ、植えつけていく。苗畑の隣には、大きく育ったチークの木が並んで生えている。１列目は組織培養された種から育てたもので、２列目以降は自然のチークの種から育てたもの。一見、林のようにしか見えないが、よく見ると、１列目は、まっすぐに伸びているが、２列目以降は、曲がったり、斜めに伸びていたりする。これは、苗畑の管理会社が、チークの種子の組織培

養の実験に植えたものである。現在では、この実験によって、良質のチークの種子を作ることに成功し、インドネシアで唯一の組織培養のできる会社として認められている。

【チーク植林地】

次に、火災により消失した森の跡を見学に行く。かつての森はまったく跡形も無く、焼け残った黒焦げの棒が所々に立っているだけである。ススキのような草が一面に生え、草原のようである。そこが熱帯雨林のジャングルだったとは、信じ難い。一度、火災で消失した熱帯雨林は、生態系が壊されたため、もう元には戻せない。そこに在来種は育たないのである。アジア植林友好協会が、その中の約 200ha の土地を永久借地として借り上げ、チークを植林している。植林した木が整列して立っていて、林を作っていた。２００１年１２月より植栽がスタートし、現在までに約 15 万本が植栽されている。その一部に、私たちも植栽した。苗木のビニール袋を取り、根に土が付いたまま穴の中央に置き、肥料が混ざった土をかぶせる。

植栽されたチークは１０年後に伐採し、貴重な木材資源として活用される。天然林ではなく、人工的・計画的にチークを栽培することは、天然林の伐採を緩和することにもつながる。また、１０年後伐採された土地には再植林されるので、『持続可能な木材資源の供給』が実現される。

【ブキットバンキライ公園】

次の日、ブキットバンキライ公園をトレッキング。林業公社が管理するこの公園は、１９９７年の大森林火災からも難を逃れ、豊かな熱帯雨林が残されている公園である。しかし、林業公社がここで所有する１６００ha のうち、火災から逃れた土地は６００ha しかない。残りの１０００ha は、二次林や疎林で、完全な『森』に戻すためには何らかの対処が必要である。

公園といっても、平地ではなく、ジャングルの中の小道を歩く。熊が木に登った跡や、タランチュラの巣を見ることができた。不法に伐採されようとした樹齢１５０年のバンキライという大木が横たわっていた。この木は、大きすぎて運べなかったのだろうと推測される。熱帯雨林地方の木には、年輪が無い木があるそうである。気候が一年を通して変わらないので、年輪ができないということである。木には、年輪があるのが当たり前だと思っていたので、それは、大きな驚きであった。この地域の土地は、表層土が１０cm 程度しかない（日本の森林は、８０cm）ので、木の根が下に伸びることができず、地上に出てきてしまう。そのような根っこを、板根という。板根を持つ木が、たくさん生えていた。

途中、『キャノピーブリッジ』という橋があった。１９９８年にアメリカ人が、ジャングルの上方の枝や葉を観察研究するために作った、高さ３０m の橋である。高いところから見るジャングルは、また違い、遠くまで広がるジャングルが良く見えた。

ジャングルの端に来ると、大森林火災の焼け跡があった。以前はもっと大きなジャング

ルだったのだ。大森林火災は、農民の焼畑と、エルニーニョ現象が原因と言われている。毎年、雨季の前に畑を焼き、雨で鎮火していたが、その年は、雨が降らず、火災が広がってしまったという。火災の傷跡の残るその地に、メランティの苗木を植樹。

ジャングルは、人の手で作ることはできない。ジャングルのひとつひとつの木が種を飛ばし、その種が大きく育ち、徐々に、ジャングルはその大きさを広げていく。気の遠くなるような年月を掛けて。私たちは、そのお手伝いをほんのちょっとしたまでだ。人間の非力さを痛感すると同時に、ジャングルになるまでの膨大な時間に思いを馳せ、自然の偉大さに感服する。そのジャングルを一瞬で消失させた人間の愚かさ。なんとも言い表しがたい虚脱感に襲われる。

【ボルネオ・オランウータン・サバイバルファンデーション（BOS)】

ここには、オランウータンが７６頭保護されている。オランウータンは、９７％人間と同じ遺伝子を持っている、もっとも人間に近い動物である。“オランウータン”は、インドネシア語で『森の人』という意味であり、その名のとおりに、オランウータンは森の中でしか生きられない。森林破壊がオランウータンの減少に拍車を掛け過去２０年間で生息数が８０％も減少した。調査によると、インドネシアやマレーシアに残るオランウータンの数は、最大でも２万４０００頭。１万５０００頭以下に減っている可能性もある。

最近まで、インドネシアの村人は、ペットとして飼うために、オランウータンの母親を殺し、子どもだけを捕獲していた。今は、インドネシアの法律で禁止されているが、そのことや、オランウータンの保護の必要性を知らない村人が多いため、BOS は、地域で啓蒙・教育活動もしている。

ここのリハビリセンターでは、ペットとして飼われていたオランウータンを保護し、森で自己生活できるようにトレーニングをしている。今まで、約４００頭のオランウータンを森に返した。チンパンジーやゴリラと違い、群れを作らないオランウータンは一生のほとんどを熱帯雨林の木の上で過ごす。木の実、皮などを食料とするため、彼らは森が無くては生きていけない。しかも、人の手が入らない森が必要なのである。保護されたオランウータンは、人間に育てられたので、野生で育ったオランウータンよりも弱く、野生のオランウータンとは一緒に住めない。だから、野生のオランウータンがすんでいる森とは別の森が必要なのである。森林の伐採や、農地の拡大により、森に返せる土地が少なくなってきたと、ガイドの人が説明してくれた。１頭に２ha の森が必要だといわれている。

BOS の土地の一角に、オランウータンの食料用に果物の木を植えている。私たちは、マンゴーやドリアンなど、何種類かの木を植栽してきた。

オランウータンの生存数は、熱帯雨林の生態系の健全度を表すバロメーターである。特に、彼らは植物の種子を蒔く役割があり、森林を維持・発展させるために欠かせないのである。オランウータンが元気に棲息できることは、熱帯雨林も健全に繁茂していることを意味している。

【チーク林】

植林６年目のチーク林を見学。直径２０cm、高さ１０m 以上にもなる木が林立していた。ここでは、木と木の間のスペースを利用して、パイナップルなどの換金作物を試験栽培している。こうした取り組みはアグロフォレストリーと呼ばれ、林業と農業の両立を目指す手法である。地域の農民がアグロフォレストリーによって、生計を立てることができれば、定住農業が普及し、結果的に彼らの焼畑を食い止めることにもつながる。また、そこに住んでいるので、チークの伐採・盗難を防ぐ役割も担っている。

【終わりに】

このように、インドネシアでの植林活動を終えた。今回の植林は、ほんの少しでしかなかったが、たくさんのことを学ぶことができた。砂漠の乾燥地帯とは違う理由があり、またここも人為的な要因が大きく関係し、植林が必要になってしまった。インドネシアの住民は、「木は、こんなにたくさんあるじゃないか。ほっといても育つではないか。植林をする必要がどこにある？」という人がほとんどだそうだ。私も、インドネシアに来て、豊富な草木を見て、そう思った。砂漠地帯で、ほんの一握りの雑草が生えただけでも喜び、枯らしてはいけない、と大切に扱った２年前。それとはまったく違う環境。放っておいても草木が伸びる気候。しかし、長い年月をかけて出来上がったジャングルは、簡単には取り戻せない。そこに不法に伐採をするものがいる限り、いたちごっこは終わらない。

先進国の国々で、木材の需要が依然として多いのも事実である。日本も、多くの木材を輸入している。我々の意識の持ち方次第で、環境は変わる。植林を行っている企業も多くあるが、私たちは、もっと多くの人に森林の保護の重要性を訴え、『持続可能な木材資源の供給』を目指していかなければならない。